

今がすべてではないこと

ふくだ まこと
環境省自然保護官 **福田 真 氏(高校53期)**

2001年 立川高校卒業
2003年 信州大学教育学部入学
2008年 環境省入省(名古屋)
2010年 沖縄県やんばる事務所勤務(ヤンバルクイナ保全、ロードキル対策等)
2013年 沖縄県西表事務所勤務(イリオモテヤマネコ保全)
2015年 長野県信越事務所勤務(ライチョウ保全)
2020年 霞ヶ関:本省野生生物課勤務(風車へのバードストライク対策等)
2023年 北海道事務所(札幌)勤務(シマフクロウ、ウミガラスやレブンアツモリソウ保全)
2025年 長野県信越事務所勤務(再びライチョウ保全)



■卒業後のこと

2浪して大学に入り2浪して就職し、レンジャーとして現在ライチョウを絶滅から救う仕事をしています。ライチョウは、人が立ち入らない高山帯に生息し神の鳥と呼ばれ捕獲されなかったことから、人を全く恐れません。一方で外国のライチョウが人の気配を感じると一目散に逃げるのは狩猟の対象だからです。人の生活圏でないところに生息する野生動物にまで、その国の文化が浸透しているところに、古代から紡がれてきた日本独自の人間と野生動物との関わり方の要素があると感じています(それが明治維新以降に乱れるのですが…)

何も決まらないまま高校を卒業し、就職するつもりのところ、大学という時間は絶対にあったほうがいいという親の強い意見により、何となく大学を目指すことになりました。ある時、新聞の表紙のコラムに、木に登っている信州大学の中村浩志先生を見つけ、この研究室に入りました。托卵の習性があるカッコウを対象として、卵を産み付けられる宿主との攻防戦から進化にまつわる研究をしていた研究者です。6人入ったら5人辞めるような研究室で理不尽に耐える精神を養いました。

サッカーのプロのコーチを第一志望として、ただ無職ながら結婚していたので親戚が勤めていた長野県の林業職も視野に林学の勉強をゼロから始めました。かつて中村先生から勧められていた環境省も同じ試験で受けられるとのことで選択肢に入れ、1年目はどこにも受からず、2年目に最初に引かかった環境省に入った次第です。



恩師の中村先生とのライチョウ調査(大学時代)

環境省の自然保護官はレンジャーと呼ばれ、2～3年の任期で全国転勤のもと、国立公園の管理や野生動物の保護管理を行っています。絶滅危惧種のなかでも危機的な動物は保護増殖事業が行われており、専門家らと保全活動を行っています。私は、1年目こそ名古屋の大きな事務所に配属されましたが、その後は、沖縄島北部のやんばる事務所で日本で唯一の飛べない鳥ヤンバルクイナや、そんな面倒な生き方をしていたら絶対絶滅するでしょというヤンバルテナゴガネ(実際ほぼ絶滅しかかっており救う手立てが見つかりません…)の保護管理を行いました。



ヤンバルクイナ放鳥
(交通事故に遭ったヤンバルクイナを野生に帰す)

内地に帰れると思ったらさらに南に飛ばされ、日本最後の秘境と言われる西表島でイリオモテヤマネコに関わりました。世界自然遺産登録の指定基準を満たすため、全島を国立公園にする拡張作業も行いました。この仕事、対象が自然とはいえ、結局は人間相手でありレンジャーはその孤独な調整役として役割を果たさなければなりません。見慣れぬ地域に入り込み、地域の住民のみなさんを目の前にして仕事をする国家公務員は林野庁の森林官かレンジャーしかありません。「レンジャーは、責任を持った足軽」と私はよく表現しています。

その後、長野の事務所に赴任し、恩師の中村先生とライチョウの保全に関わることになります。保護増殖事業がちょうど立ち上がる時期で、環境省の役人が(例の理不尽さに)みな苦戦していた中村先生のお世話役です。ライチョウが絶滅した中央アルプスでの復活プロジェクトはまさに日本の保全技術の粋を集めた集大成となって現在進行形です。北アルプスから飛来したと思われるたった1羽のメスから始まったこのプロジェクトは、5年を経て130羽近くの個体群が確立しつつあります。保全技術を確立させ、日本初の保護増殖事業の卒業を目指し、仕上げる作業を続けていきます。

人を怖れないニホンライチョウ
：2025年6月中央アルプスにて



雪の中で寒さをやり過ごしたライチョウが顔を出す
(提供:中村 浩志)

参考図書

ライチョウ、翔んだ

ライチョウ、翔んだ。| 集英社インターナショナル 公式サイト

神の鳥ライチョウの生態と保全

神の鳥ライチョウの生態と保全 | 大学案内 | 岐阜大学

■立高生へのメッセージ

高校時代はグレルほどの意気地もなく微妙なひねくれと半端な反抗心で多くの人に迷惑をかけました。先生方、サッカー部、担任の先生、特に遅刻は学年ダントツトップで、廊下を自転車で走り親を呼び出され、授業で「おまえは悪者の目」と言われた自分を、進級させるためにかけあってくれた担任の先生には感謝しかありません。卒業式はペンギンの着ぐるみで参加し、あんなやつがいるぞ、と驚嘆したら自分の息子だったという父親にもすまなく思います。学校の規律を破るだけやぶってきた自分が、今は法律の番人をしていることの巡り合わせを考えるにつけ、今がすべてではない、ことだけはみなさんに伝えられることかもしれません。